

支部だより

発行
東北大学電気系
同窓会東北支部
仙台市荒巻字青葉
電話 22-1800

発行責任者
守屋 稔

(題字 高野知彦氏)

報告

電気系同窓会 永井健三

会員宇田新太郎教授には、発明は衆知の事で、この研究に対し昭和七年学士院賞、昭和三十六年紫綬褒章、昭和四十一年勲二等瑞宝章が授与されました。その他先生の研究に対し電子通信学会から論文賞と功績の招きによりインド国立物理研究所電子工学部長に就任しインドに初めてマイク波を紹介し日本製マイク波通信施設を設置し実用に供したのは先生の大きい功績の一つであります。

本会会員名譽教授室は、去る八月一日富山師範学校を三年間中絶論として勲に入学され、その後、引学されたが、となられ、は本学助教た。昭和

宇田先生御逝去

八月十八日午前三時東京の癌研附属病院で御逝去になりました。

八月廿三日には元氣に来仙され「八木先生の思い出」を出席者一同に感銘深く講演されたのですが、それから百日たたないのに突然の御逝去は残念至極です。八十才でした。

八月卅日東京青山葬儀所で、しめやかながら盛大な葬儀が行われ、同窓生の多数が参列し同窓会から弔辞と生花を供えました。



故宇田新太郎先生

先生は富山県の出身で広島高等師範学校をへて大正十三年東北大学工学部電気工学科を卒業されました。八木先生に師事され、「八木・宇田アンテナ」の研究

昭和三十五年東北大学を定年退官される迄東北大学で親しく先生の教えを受けた学生数は凡そ二千人に及ぶと思えます。同窓会員一同先生の訃音に接し悲しみに堪えず謹んで哀悼の意を表します。

賞、電気学会から浅野賞、昭和廿六年第一回河北文化賞、郵政省から郵政大臣賞、テレビジョン学会から功績賞などを受賞されました。IEEEのフェローで

昭和三十五年東北大学を定年退官される迄東北大学で親しく先生の教えを受けた学生数は凡そ二千人に及ぶと思えます。同窓会員一同先生の訃音に接し悲しみに堪えず謹んで哀悼の意を表します。

宇田先生を偲ぶ

虫明 康人

元会長、本学
田新太郎先生に
月十八日、癌研
御逝去された。
常に健康に恵
れた先生が、す
の期待に反して
ことは、誠に痛
ある。

川大学客員教授、武蔵工業
年から数年間に亘って行
大学非常勤講師、三菱電機
（株）および日本テレビ放
送網（株）顧問を勤められ
る傍ら、多くの著書を執筆
された。その著書の数は、
最近十年間、すなわち、七
議への紹介的報告だけが八

は日本のマイクロ波無線通
信に先鞭をつけたものであ
る。
以上のような一連の「超
短波長電波の研究」に対し
帝国学士院東宮御成婚記念
賞が授与され、これらの御
業績が、東北大学の名を世
界にとどろかせた大きな
理由の一つとなつてゐるこ
とは万人の知る所である。
この他、本研究に関連した
御業績により、帝国発明協
会恩賜発明奨励金、日産発
明推奨金、第一回河北文化
賞等、数々の賞が授与され
てゐる。

この他、御研究の項目は
多岐に亘り、その御業績は
枚挙にいとまがないが、先
生の総合的な御業績に対し
ては、電気学会浅野賞、電
気通信学会功績賞、郵政大
臣賞および紫綬褒賞、米國
電気電子学会（IEEE）
終身フェロウのような、そ
れぞれの分野での最高の賞
が授与されており、さらに
昭和四十一年十一月三日に
は勲二等瑞宝章が授けられ
てゐる。また、御逝去に際
しては、従三位・勲二等旭
日重光章が贈られた。

一方、お人柄の面では、
先生は極めて謙虚な方であ
られた。私共に対しても、
受賞とか昇任のような機会
ある毎に「福はゆる程穂を
垂れる」、「能ある鷹は爪
をかす」などと繰り返して
御注意下さったが、先生御
自ら率先して、そのお言葉
通りに行動された事を、具
体的事実と共に良く存じ上
げている。先生はまた、率
直で細事にこだわらない大
らかな御性格であられた。
そのためか、先生は接する
人に親しみを湧かせ、人々
を引きつけ、多くの後輩達
の敬愛的となつておられ
た。

明治二十九年六
県にお生れにな
卒業されて、約
校（旧制）に教
務された後本学
を卒業された。
昭和二年五月に
授に任ぜられ
年九月より満二
ヶ年間米國お
よびドイツに
留学の後、昭
和十一年六月
本学教授に昇
任され、昭和
三十五年四月
停年退官され
るまで、極め
て長期間に亘
り、超高周波
工学の研究と
後進の指導育
成に尽力され
た。その間昭
和三十年には
ユネスコ技術
派遣され、エ
ス部門の長と
し、発展途上
国に赴かれた。
東
官された後は、
経て神奈川大学
部長を歴任され
六年三月停年退
その後も、神奈

先生は、一貫し
て、その時代
の最短波長帯
の電波に関す
るものであ
り、常に新し
い分野への開
拓的研究であ
った。このよ
うな研究方針
はマイクロ波
真空管の研究
からミリ波進
行波管の研究
究、八木宇田
アンテナの設
計法の研究、
およびレーザ
ービームによ
る光通信の研
究へと発展さ
れ、それぞれ
輝かしい成果
を納められて
いる。たとえ
ば、運動電荷
による静電誘
導起電力とい
う新しい概念
を導入したマイクロ波真空
管の理論的研究に対して
は、電気通信学会秋山・志
田賞が授与されている。ま
た、戦後、協力者と共に行
なつた八木宇田アンテナの
設計法の研究は、一冊の英
文著書に纏められており、
それに対しては、電気学会
文献賞が与えられている。
八木アンテナ株式会社が創
立されて最初に発売された
八木宇田アンテナは、八木
先生の御依頼により、宇田

在りし日の宇田先生
昭和51年5月23日 於 八木先生胸像除幕式記念晩餐会



十才を越えられてからだけ
でも四編に及んでいる。
さて、先生の研究上の御
業績は、その量においても
質においても、世界的に卓
越したものであったこと
は、周知の通りであるが、
就中、特筆すべきものは、
再放射体の導波現象の究明
と八木宇田アンテナの発
明、および、それを使った
短波長ビームの伝送に關す
る研究である。これらに關
する研究は、八木秀次教授
の指導のもとに、大正十五

木先生と連名になつてい
る。この間の事情について
は、後に米國で出版された
アンテナ工学ハンドブック
にも詳細に紹介されてい
る。先生はさらに、新しい
高感度マイクロ波送受信機
を考案され、これと八木宇
田アンテナを組合せ、仙台
を中心として塩釜、松島、
金華山等との間、また、山
形県の酒田、飛鳥間、新潟
と佐渡島との間等で、電波
による通信実験を行なつて
成功しておられるが、これ

のであったが、これもその
研究成果の一つであった。
このような「テレビ・アン
テナの開発」によつては、
テレビジョン学会功績部門
丹羽高柳賞が授与されてい
る。

また先生は、研究室での
なごやかな会合や、御停年
後の先生を囲む会などで、
くつろいで話されることが
大変お好きであった。その
様なお席での先生のお話
は、何時の間にか、お若い
頃の御研究の思い出から、
終戦前後の混乱時を耐えて
過ぎられた山形での疎開生活
の思い出へと移り、時間を
超越して語り続けられるの
が常であった。

最後に、先生の御業績が
永久に残ることを確信し、
謹んで先生の御冥福をお
祈りして、追悼文とした
い。

八木先生御逝去・胸像完成

会長報告

永井健三

東北大学電気系の同窓会として過去一年を省みて、大きい出来事が二つありました。一番大きい出来事は八木秀次先生の御逝去であらうと思います。

我が敬慕する八木秀次先生には、かねて御不快でいらせられ永らく慶応病院に入院加療しておられました。医師たちの現代医学の粋をつくした治療と、御家族の手厚い御看病の甲斐もなく昭和五十一年一月十九日御逝去になりました。同窓生一同痛恨の極でありました。昭和五十一年二月三日には、第四回卒業の松前重義、東海大学総長が葬儀委員長となり新宿区南元町の千日谷会堂で葬儀と告別式が行われました。さしも広い会堂も先生と別れを惜しみ悲しみに沈む人々にあふれ盛大なしかも厳粛な儀式が行われました。葬儀につよく告別式にはいつまでも続く長い列で、如何にも多くの方々が先生を敬慕していたかがわかります。東北大学の同窓生も多数列席されました。同窓会からは生花を

献花しまして哀悼の意を表しました。

次に報告すべき事は去年の東北支部だよりで御承知のことと思いますが「八木先生の胸像を母校東北大学に贈呈する事業会」の事業完了についてであります。発起人の中から百二十八名の方々へ実行委員会をお願いし和正信教授を実行委員長に御願ひし一切の事業を実行委員会に委任した事は去年報告してあります。八木先生の名の然らしむる処と思えますが同窓生並びに先生旧知の方々から浄財が集り総計九百万円余に達し最初の目標六百万円をはるかに突破いたしました。胸

像は佐藤利三郎教授のお骨折りで二科会会員の吉野毅氏に製作をお願いしました。吉野氏は精魂をかたむて製作に当られ、八木先生と極めてよく似た胸像が出来上りました。台座も立派な石で稀にみる大きい石です。この胸像が講義棟にはさまれた中庭の芝生の中央に建てられましたので学生達は朝に夕にこれを仰ぎみて、よいはげみとなる事と思えます。

昭和三十二年五月廿三日に実行委員会によって胸像除幕式、記念講演会、記念晩餐会が盛大に行われましたが詳細は実行委員会の報告にゆずりこむにはふれませんが、たゞこれらの会合が盛會裡に終了することの出来たのは八木先生の声名と同窓生諸兄及び先生旧知の方々の御援助によるもので、事業完了に当り発起人代表の一人として厚く御礼を申し上げる次第であります。

同窓会を中された「東北」基礎を作られた八木先生の胸像を母



八木秀次先生像 吉野毅作

八木先生の胸像完成

実行委員長 和田正信

昨年十月十日発行の第六号の「支部だより」で御知らせしましたが、「八木先生の胸像を東北大学に贈呈する事業会」は、その後同窓生を初め多くの関係者の御好意により当初計画しておりましたより遙かに多額の献金を得、諸事物価高でこの種の計画が思うにまかせぬことが多いときにもか

かわらず、当事業会は順調に事を運ぶことができました。胸像の製作者芳野毅氏の精魂こめた作品が見事にでき上り、去る五月二十三日の午後除幕式を行いました。この完成に先立って八木先生は亡くなられましたが、未亡人、御子息をはじめ御遺族の皆様、多

くの同窓生、旧知の方々の参列を得、東北大学側からは学長加藤隆興先生、工学部長前田四郎先生の御出席があり、心あたたまる会合とすることができました。

御承知の方も多いと思いますが、電気・応物系建物の講義棟の中庭約千平方メートルを整理し、南に向った遙やかな傾斜面の中央にきれいな大理石の台石をおき、その上に先生の胸像がのっています。中庭は芝をはりかえ、北側の周辺には小さな像」という筆蹟のレリ

先生はすまされたが、遺に残りま座の正面の像」という筆蹟のレリ

の当日はまだ芝ののびが小さく、それほどでもなかったのですが、八月に入って芝の緑が一段ときれいになり、学舎にふさわしい落ち着いた風情となりました。

筆蹟のレリれており、太郎先生の先生が筆をやはりレリこまれていた窓会の大生

先生はすまされたが、遺に残りま座の正面の像」という筆蹟のレリ

筆蹟のレリれており、太郎先生の先生が筆をやはりレリこまれていた窓会の大生

筆蹟のレリれており、太郎先生の先生が筆をやはりレリこまれていた窓会の大生

あります。八〇をしたとお知りになったら胸像を御生前にお目にかけてお叱りを受けた事と思いたかかったと思つて居る次第です。お叱りを受けてもこの

木先生の胸像を

御寄贈いただいて

二村 忠 元

学部電気・通信・電子工学科に贈呈する事業会より永井健三先生をはじめとして御関係の方々・実行委員会・同幹事の方々、そしてまた、趣旨に賛同されて御寄附をよせられた多くの方々一同に、現役の電気系教職員を代表してその御尽力と御好意に厚く御礼申し上げます次第である。

題字 鳥山四男書



銘 文

に亡くなられました。これまた胸像とともに永く残り、後輩の若い生徒に呼びかけていくことと思ひます。微力にして非才の私ですが、多くの方々の御支援を得てとにもかくにもこの事業を完了することができました。肩の荷をおろしほつとして居る昨今でございます。本文を通して皆さん方に心から御礼申し上げます。

人類の文明を、自ら破壊したという事は痛快(痛恨の誤りか?)の極みである。ウイルソン氏に依つて提唱された大理想が一場の夢であるらしい心配もあり、又平和の声と共に新たな脅威が世界を襲うらしくもあるとはいへ、講和条約の調印は世界の始まりとして誠に慶賀に堪えぬことである。この時に当たつて、理学工学に携わる吾人がその天職に就て、考えるところを延べるとかうである。

今度の戦争ほど理学と工学とを応用したものはない。あらゆる恐怖すべき殺戮法を理学工学の顯著なる応用として、世人に示した。その為には戦争は戦争の必要具として尊ばれた。又他日戦争に勝たんがために理学工学を奨励すべしといふ人さえある。これは以ての外の事である。

真理の探求に没頭して居る科学者の研究結果が偶々戦争に役に立ったからと言って科学者の理想が戦争に在ると誤ることの不合理は言うまでもないが、工学というものは純正の学問でないためにそして、真理というものは以外に他の大いなる理想を有するがために誤つて工学は国家主義の發揮を目的のものとも考えられ、一國経済政策の道具とも思われる。又国防戦争の機関とも考えられるようである。

工学の純正理学と異なる所はその倫理的意義を有し、著しく「善」の理想を有する点である。工学は人類の文明進歩を目的として居るもの故に今日人類の文明の事業の大部分を背負つて立ておると思われる。日に月に我等の住むこの世界を、新たな世界たらしむる役目を持つて居る。この工学が不幸にして

戦争に役立ったことは寧ろ最も不本意とする所である。

今や文明事業は再び始まらんとして居る。工学を専攻する者は独一國一社会の経済、又今後の経済戦争の勝利を考えうるに止まらずして、障害なくこの人類の文明事業を進めんと欲するものである。

茲に今一つ述べたいことは戦争の責任が理工学にあるかの如く論ずる人の誤謬である。前述の如く理工学は平和事業である。その発端が戦争の原因する謂はなし。戦争の真因は寧ろ理工学以外の方面に於ける欠陥に原因すと言はなければならぬ。例えば、芸術の進歩が科学の進歩に比して余りに貧弱であるとか、宗教が全然墮落して居るとか、世人が全く戦争とは無関係と考へて居る方面の事情が真に今回のような惨禍の原因である。理工学者は盛々その事業に奮励せんとして居る。再び戦争が起つても、理工学はその責を負うことはできない。若し形而上学の方面が現状の如く続くならば、其の不振が総ての原因であり、文明進歩の障害であると言わなければならぬ。

吾人の憂いは科学偏重にあらずして文学偏軽にあると思ふ(談)。

原子爆弾以来、科学の真価が問われ、公害問題の拡大以来工学の真価が問われている現在にも通用するこの先生の考え方は、それも三十三才の時のこの文章は、特に文学偏軽などの言葉は、いかにも八木先生らしく、貴重なものとして、敢て紹介させて頂いた次第である。

(昭和五十一年 八月二十日)

理工学は平和事業

八木 秀次

世界の人類が過去五年の間殺戮争闘を事として折角十数世紀を費して築き上げた

八木先生の思い出

鳥山四男

こういうお目出度い席で私が八木先生の思い出をお話するというのを、非常に光榮に存じております。

私流に考えますと、八木先生は自然科学について、電気は勿論物理に關しても非常に造詣が深く、物理の理論を基とした先生一流の哲学を持っておられたようです。これを通して先生一生のお仕事をやられたのではないかと思ひます。

八木先生について我々が感じましたことは、先生は非常に独創の才能があられたこと、それから先見の明を持っておられたこと、ことです。その他、私が八木先生について非常に感じていたことは、先生は人を見る目があたりであったといふことです。とにかく人物

を非常に洞察する力がありましたので、そのために学生の教育とか、あるいは大学の他の運営管理という点においても優れておられたのだと思ひます。

大正の末から昭和の初めにかけて、齊藤報恩会から莫大な金をもらってそれを通信及びエレクトロニクスの研究に使ったといふことを考へてみますと、今ならこれは流行りものですか、こういう研究をやることは当然じゃないかと思ひますけれども、八木先生の東北大学教授になられたそして私が東北大学に入学した大正八年の頃は、大学では通信という講座がなく、電信電話という講義を外來講師がやっておったわけです。したがって、この

当時通信及びエレクトロニクスをやったといふことは先生の非常な先見の明の賜であつたと考へるわけです。その頃はまだ強電とか弱電とかいつており、弱電のことをやるなんていう学校は非常に少かつたのでありますから、こういう世界に希に見るような通信及びエレクトロニクスの学園ができたといふことは、誠に八木先生のお力だと私は考へておる次第であります。

したがって、東北大学の電気分野の教室及び研究所がこのように盛んになった今日、先生の胸像を母校に贈呈することは誠に当然のこととて、時宜を得たことだと私は考へております。

先生の研究の中で代表的なもの、やはり八木アン

テナのことだろうと思ひます。先生の八木アンテナのお仕事を私なりに考へますと、いわゆる serendipity というものを發揮された研究だと思ひます。この serendipity という言葉は、辞書には「當てにしていなものを偶然に見出す才能」又は「掘り出し上手」といふように書いてありま

す。これは、一七〇〇年代に作られた言葉のようで、日本にはそういう思想がないので、このことをうまい一言でいう言葉がないわけでありませうけれども、私が考へますには、実験的に得た結果からヒントを得まして、先生の素晴らしいひらめきによってその問題のキーポイントをおさえてそしてその研究を大成させるといふようなものであると思ひます。全ての独創は serendipity によるものばかりというわけではなく、理論整然と数学的に独創的技術を編み出すということもありませうが、serendipity を發揮した研究というものは、非常に突飛で凡人の氣の付かないような研究が多いと思ひ考へております。

八木先生は serendipity に非常に優れておられたといふことを申し上げます。

大学の運営管理ということでは、東北大学においては非常に成果を挙げられましたが、もう一つ大阪大学のことをお話ししたいと思います。先生が長岡半太郎先生の招きに応じて大阪大学の理学部長として昭和九年に行かれたわけでありませうけれども、先生と長岡先生とはどういふ御関係でそのようになったのかは私は知りませうが、おそらく、岡先生とお互いの人物をよく御覧になつて相信じておられたので、大阪大学の理学部の建設という大きな仕事をうまくやらされたのだと思ひます。ノーベル賞受賞の湯川秀樹さんとか、菊池正士さんというような立派な理論物理学者を生んだ理学部を工学部出身の先生が作られたといふこ

とは全く驚く思ひます。それから終英会理事長の先生と意氣がますますか、招かれますが、大学の学長にこの大学は終身つたばかりか、力研究所といふところ、このかかるといふことは、ば常職外れのもの、けれども、五島翁との互いに人物をよく敬し合ひ、信こさういふのだと私は思ひます。

八木先生はいろいろなな生られますが、おいて偉大なておられます。ついでに時聞いたします。

八木秀次先生を偲ぶ

東北大学名誉教授
宇田新太郎

八木秀次先生は去る一月二十八日八十九才の御高齡で天寿を全うされ御他界になつた。ここに謹んで追憶の辞を述べると共に御冥福をお祈り申し上げます。

先生は明治十九年一月二十八日大阪の旧家にお生れになり三高を経て、明治四十二年東京帝国大学工科大

学電気工学科を御卒業、仙台高等工業学校教授として御赴任、大正二年から五年にかけて（一九一三—一九一六年）独英米に留学された。最初にドイツのドレスデン工科大学のG・H・バルクハウゼンの許で、アーク放電を利用した電波の発生について研究された。ところが翌年先生がオーストリ

ア、スイス、イタリアなど御旅行中第一次欧州大戦が勃発し、先生はドイツに帰ることが出来なくなり、英國に渡りロンドン大学の有名なJ・Aフレミング教授の研究室で再びアーク振動の研究を続けられた。その後先生はフレミング教授の許を辞して米國に渡り、ハーバード大学のピアース教授のところへ約一ヶ年の研究を終えて、大正五年帰國された。その頃アメリカでは研究者達こそぞつてドウフレ発明の三極真空管の研究開発に目をむけていた時代であった。

この外遊によって先生は電気工学の開発の新天地は従來の強電工学ではなく、今日でいうエレクトロニクスすなわち弱電工学の分野であることに強い確信をお持ちになるようになった。たまたま大正八年には東北大学工学部の開設を見、先生はその創設委員となり新工学部を理学を基礎とする特色あるものにするように努力された。また電気工学科においては先生はかねての抱負を実現すべく率先して研究の中心を弱電にむけられた。そこへまたまよ

いチャンスが訪れた。それは周知のことではあるが財団法人齊藤報恩会が出来て八木、披山、千葉の三教授の申出の「電氣を利用する通信」の共同研究に對し多額の補助費を決定した。北大学の電氣工学科に電氣

通信に關する共同研究の一団が生れ今日もなお続いて業績をあげている。これは先生の先見の明と御努力の賜である。

この研究グループはその後すばらしい活動をしその業績がひろく世に認められるようになった。しかし「出る釘は打たれる」で平担な道のみを歩んだわけではない。風当たりも強く多くの非難がとんできた。電氣学会からは「東北大学が投稿される論文の数が通信に片寄り多過ぎる、会員の退会者が多くなつて困る」という抗議がきた。また雑誌オームには公然と或は匿名で悪口が出た。これに對して先生はひるまず敢然とオーム誌上に二回にわたり「弱電工学の弁」、「再び弱電工学について」と題し論争をされている。

先生は文化勲章受賞の記念講演でまたこう述べている。「私は一九二八年アメリカへ行つたとき岡部君の分割陽極マグネトロンと宇田君の超短波導波管を使った指向性電波の伝搬の講演をニューヨークで話したところ大変珍しがられ、あち

こちで講演を依頼された。これらの研究は日本では割合に珍しがられないんです、ことに岡部君がマグネトロンをやつてゐることにしても彼は脱線してゐる。あんな研究はやめさせよという話も聞いたし、宇田君がやつてゐるのはセツトを作つてあちこち持ち運んで試験をやつてみるなんて、なんだ映画のロケーションみたいなことをやつてゐるといふこともあつてゐるんです」云々

私は弟子として約十年間先生のもとで研究してきた。自分ながら随分自由勝手に実験をやつてきたが先生から一度もおことやお叱りやうけをうけたことがなかつた。また一度も雑用などおおせつからなかつた。図面を用意するなどはみな先生の室の秘書がやつた。このため思う存分研究ができる時間があつた。

人は先生の妥協をゆるさない強烈な御性格のことはよく知つてゐるが、他の一面先生はきわめて庶民的であつた。これは余り知られてない。私的には余り知らまなないが私の母が仙台に來

て先生宅を尋ねる。先生は毎ふさわしいお礼であつた。來て先生の話を話して感謝の長女生れて内が急性のり入院して私がうちで私がうちに「赤ん坊をさい」といひたい。意はいつもあつた。先生は弟を度々呼んでおつた。よつと申上まつたようであつた。先生の思ひは、先生の手で青葉の胸像が建つて地下でびんになつてます。先生程を。

定年退職者の弁

大泉 充郎

このたび幹事の先生から東北大学の思い出を書けとの御命令で筆をとったのだが、「思い出」は苦しかった事、辛かった事が昇華して皆楽しく思われるような時点で書くもので、私の場合東北大学の生活は未だ記憶に余りに生々しく昇華するに致っていない。私が在任中に考えていた事、計画が未完成で終わった事等はどうか。私が退いたことで東北大学が益する面が多いとは思わなかった。一方損する面もあってそれが現時点では小さなひびわれのようであっても将来大きくなることはない。余計心配になるのである。

その一つは情報工学の今後の育て方である。情報工学は電子・通信工学を母胎の一つとして生れた事は事実だが、その分派ではなく相互に多くの部分で関連し合っているもの本質的に別な学問である。ではどこ

東北大学を離れるにあたって

本多 波雄

この四月一日より、東北大学を離れて、名古屋大学工学部電子工学科に移りました。早速、同窓会幹事から、仙台の思い出を書きよるに依頼されましたが、九才から今日まで三十四年間を過ごした東北大学の生活は私の人生そのものであり、思い出という過去のものとしてふりかえることには、いまだとでもできそうにもありません。しかし、幹事の御厚意で、私に貴重な紙面を与えられたのですから、御挨拶を兼ねて駄文を草することとします。

私が東北大学工学部に入学したのは昭和十七年のことでした。この年、通信工学科の設置されることになり、そこに全国から多く

の学生が集まりましたが、私もその一人でした。私は踏み入れたことがなく、未知の土地を訪れる期待もありました。今では家並に囲まれて、探すのに苦労する構牛願望の松も、当時は、台の原の丘の一目でそれとわかるように驚え、その丘の下を「坊ちゃん」にでどかか走っているというふうで、仙台はなかなか牧歌的な雰囲気を持たせられた町でした。また、大学の北門から一番丁にかけて、かなりの数の本屋が立ち並び、一軒の大きな本屋の二階はちよっとしたレストランになっていて、食事時には先生をかこんで学生の

工学”を援助するが、支配しないという寛容さが望まれる。

次に大型計算機センターの運営について、初代センター長として私は計算サイバネティクスを行う一方将来応用情報学研究センターとタイアップし実用的な研究を行うことを考えた。TSSによる遠隔端末からの使用方式は大型計算機センターの発足(昭和四十四年)の数年前から私の研究室で研究を行っていたもので、私は自信を持ってこの方式を東北地区に強引に普及させた。更にパッチ能力も、予算の二倍ある京大に匹敵し、予算の七割多い東大の約四倍となり、文部省の係官に「同じ予算でどうしてこう能力が違うのでしょうか」と感心されたのであった。しかし、利用者の先生方は私にセンター長をやらしておいだたのでは利用者の主体性が失われる?という点に不安を感じられたのか、私のセンター長は一期(二年)で終了、私の方針を実現することは出来なかった。今日東大の大型計算機センター

団がにぎやかに食事を楽しんでいました。

このような仙台と東北大学の空気に魅せられて、大卒卒業後も教官の一員に加えていただき、今日まで夢中で過してしまっただけという感じがします。

話はとびますが、昭和二十六(二十七年頃)のこと、私は一風変わった二冊の本に出会い、それが私を情報理論の研究へ駆りたてたことになる。その本の一つは Shannon & Weaver "The Mathematical Theory of Communication"、もう一つは Wiener "Cybernetics" でした。それらはわら半紙にちかい紙に印刷された粗末なもの、今ではぼろぼろ

が六年に亘って情報関係の大型特定研究の中心となっていたこと、更に文部省が各大型計算機センターを将来の情報科学研究の拠点として発展させる計画を持っていることを考えると今更乍ら私の考が誤りでなかったと感ぜられるのである。

また処理能力にしても、他大型計算機センターに比べて、TSSに於ける優位は未だ辛うじて維持されるものの、パッチ能力に至っては最後発の名古屋大学に比べても見劣りし兼ねない状態にあり、このままを進めば文部省の係官に反対の意で敷かれそうである。大型計算機センターは電気系には属さないが種々の点で繁りがあるのに特に関心を持って頂きたいと思っている。

コンピュータ ネットワークはTSSの延長線上にあり、情報化時代の本命として、私が近年TACON ET、ALOHANETの形で国内、国外について力を入れた研究であったが、竹山先生(大型計算機センター)の五十一年度、佐藤先生の五十二年の研究費の要求が何れも不調に終わったらしいことは極めて残念であり、今後一層の頑張りを期待したい。

以上「思い出」にならないので、「定年退職者の弁」とした次第、悪しからずお許し願います。

になっっています。しかし、その内容はそれまで私が学んで来たものとは全く異質の新鮮な息吹を感じさせました。いまふうの言葉でいえば、はじめてソフトウェアの学問に接したわけです。

従来の電気工学や通信工学は通信と情報処理のための機器に関するものであり、通信や情報処理の中心味に関する学問は全く無かったといえます。そういう点に漠然と物足りなさを感じていた私には、これこそ中味の学問だと思われ、新しい学問の誕生を確信しました。

そのようなわけで、情報理論の勉強を始めました。誰に討論してもらったらいいかもわからず、細かい思いをしていました。そのようなどころへ、大泉先生が

(四面へ続く)

へき事実だと戦後、五島育五島慶太翁と台ったといわれて武蔵工業なられたわけその当時、その当時、それを再建年計画が緒にのとき、原子を素晴しい金を作られたと普通の人ならは八木先生が合ったから、他の方も方々で事をやっておそのすべに業績を残されその詳細に都合で割愛

(三画から続く) 東北大学に赴任してこられ、情報理論の研究を始められたので、勇気づけられました。また、その頃大学院へ進んだばかりの木村、野口阿教授も大泉研究室へ入って情報理論のグループも一気になぎやかに研究も進むようになり、研究も特殊な天才は別として、一般には、何人かの人が同じ問題に興味を持つと、一人でやるよりはるかに成果のあがることによくわかりました。

秋田だより

奥山 大太郎

仙台から北々西、北上線經由で二七〇km足らずで秋田に到着致します。昨秋までは特急(あおば)が一往復しておりましたが、四時間足らずでしたが、今はそれがなくなつて四時間余となりました。秋田駅から北東に聳える太平山の方向の左手、駅からは北に当る方向に徒歩で十五分、バスで数分行った所に、秋田大学鉱山学部と教育学部があります。昭和四十五年四月に医学部が設置される迄はこの二学部で秋田大学が構成されていた訳であります。鉱山学部の前身は、秋田鉱山専門学校で、その設立は明治四十三年に溯ります。現在は採鉱、鉱山地質、冶金、金属材料、燃料化学、機械工学、電気工学、土木工学の各学科に、昭和四十八年に開設された電子工学科を加えた九学科と、附属地下資源研究施設から成り、さらに附属鉱業博物館が一つ、一般にも公開されております。

さて、東北大学の電気系と秋田大学の電気系学科との関係は、資料を確める余裕がなくさだかではあります。せんが、つい先日おなくなりになった宇田先生が通信工学関係の講義の非常勤講師として来学されておりました。近年になって、和田先生と岩崎先生が非常勤講師としてお見えになっており、本年度からは竹田先生と稲場先生が新しく講師をお引受け下さいました。現電気工学科は以前鉱山電気科と称されていたといふこととでいわれる強電関係に重点が置かれておりました。そこで昭和四十八年電子工学科が設立されるに当り、東北大学関係者の中から和田研の佐藤進助氏が助教として、通研の菊地研の奥山助教が教授として赴任、一寸遅れて同吉田泰夫技官が赴任いたしました(いづれも昭和四十九年度)。本昭和五十一年度で年度更新が終了し、明春初の電子工学科卒業生が巣立ちます。これに先立ち、昭和五十年六月に電気工学科に隣接して電子工学科の新校舎が完成しております。電気・電子両工学科は一体運営されており、教官定員

は助手を含めて合せて二十四名、学生数は一学科一年四十名であります。電気工学科は基礎電気、電力、電気機器、応用電気の四工学科、電子工学科は基礎電子工学、電子回路学、電子機器学、応用電子工学の四講座から成っており、東北大学関係の教職員は総て電子工学科に所属しております。すなわち、基礎電子工学講座の担任は、東北大学工学部の応用物理学科から当学部の共通学科に來られた金山道雄教授で、同講座で佐藤進助教授が液晶を中心とした研究を行ないながら基礎電子工学関係の講義を担当しております。奥山は応用電子工学講座を担

東北大学 電気系学科の近況

松尾 正之

青葉山キャンパスは櫛並木の青葉が繁り、めっきり夏らしくなりました。亀岡神社側の隣の峰に理学部が移転しておりましたが、本年三月に最後の物理系学科の移転が完了し、これで青葉山地区には工学部理学部薬学部の三学部が揃いました。なかなか青葉山キャンパスも賑かになった訳です。去る五月二十三日かねて同窓会が中心になって計画されていた故八木秀次先生の胸像の除幕式が行われました。当日は八木先生の奥様に多数の同窓生の方々、並びに多数の同窓生の方々、誠に盛況でありました。このことは別途報告されますのでここでは省略させていただきます。電気系の建物の教室

当し、吉田技官と共に超音波通信工学関係の研究を行ない乍ら通信工学関係の講義を担当しております。なお、本年春から同講座に上田の応物卒業生である上田一助手が加わりました。上田助手は卒論を稲場先生の指導でやり、その後研究生として通研に残ったこともあって電気系とは深い縁があります。以上、とりとめなくペンを進めましたが、秋田は東北裏日本の玄関として、女性がいとお酒が美味しいういという定評があるようです。ですから交通は若干不便ですがどうぞお立ち寄り下さるよう関係者一同お待ちしております。吉田

に会社と交渉す
たしてあります。
一方、長年電気系の通信
情報工学の教育研究におよ
び計算機関係にご尽力をい
ただいた応用情報学研究所
ンター長の大泉充郎教授は
本年三月をもって東北大学
を停年で名誉教授となら
れ、四月から電気通信大学
の教授とされました。大
泉先生の永年にわたる御薫
陶に深く感謝するとともに
一層の御発展と御健康をお
祈りいたします。

電気通信研究所便り

通研広報委員会

二、丸岡章の両助教がお
られ、同専攻の学生数もか
なり多くなり賑かになって
います。なお昨年度一億円
の予算で情報工学専攻の教
育研究用に中規模の電子計
算機が購入され、電気系学
生実験室の一部を改造して
これを設置しました。東北

電気通信研究所は、現在
下記の二十研究部門と附属
通信用結晶育成実験施設、
附属格子欠陥構造解析実験
施設、附属工場及び事務部
門から成っている。音響通
信、電気通信方式、固体電
子工学、電波伝送、超高周
波、通信用電子物理、電気
通信材料学、情報理論、光
電変換工学、超音波通信工
学、真空電子装置、固体振
動回路工学、超真空電子工
学、制御工学、電子音響
学、量子電子工学、プラズ
マ電子工学、周波回路工
学。なお集積回路工学部門
は本年度新設されたもので
ある。研究所は、創設以
来、昨年九月に四十周年を
迎え、記念行事が行われ
た。この行事は、名誉教
授、元教官、諸先輩をはじめ
として多数の方々の御出
席を得て、大変盛会であっ
た。わけても、通研と電気
系学科の研究の現況ならび
に将来の展望を紹介した記
念シンポジウムは好評で
あった。ここで、このシン
ポジウムを基にした現在の
通研の主な研究内容を紹
介すると、それは、

- (1) 固体素子
- (2) 物性
- (3) 波動
- (4) 情報

の四つに大別される。(1)に
ついては、半導体、磁気及
び超伝導等を利用する新し
い固体素子の研究が行われ
ている。(2)については、固
体、気体、液体の各分野に
ついて、物性面からの理論
的及び実験的研究が押し進
められている。(3)について
は、音波、超音波、電波、
ミリ波、サブミリ波、光波
の基礎及び応用についての
研究が組織的に押し進めら
れている。(4)については、
音声認識の研究、計算機を
中心とする情報処理システ
ムの研究、情報処理の基礎
理論の研究等がある。

以上のような研究が二十
部門と附属実験施設を中心
に、電気系学科の密接な協
力のもとに活発に行われて
いる。

次に、最近行われた職員
の移動の主なものを報告す
る。昨年十一月本多波雄所
長の任期満了に伴い、電子
工学部の吉田重知教授(現
在、電気通信研究所専任)

が新所長に就任された。本

年四月、本多教授が名古屋
大学工学部電子工学科に転
出された。応用情報学研究
センター長であった大泉充
郎教授が定年退官されたの
に伴い、城戸健一教授がセ
ンター長に就任された。鹿
野哲生助教が信州大学工
学部情報工学科教授となっ
て転出された。また、高橋
文夫事務長が本年三月で退
官され、新事務長に片倉勘
十郎氏が就任された。

なお、長年通研教授を務
められた大泉教授及び本多
教授の略歴と業績の概要を
紹介します。

大泉先生は、昭和十年東
北帝国大学工学部電気工学
科を御卒業後、安立電気株
式会社に入社され、昭和二
十六年東北大学電気通信研
究所に移られ、昭和四十七
年までの二十年余りにわた
って研究所の教授として勤
務され、その後応用情報学
研究センター長を務められ
た。その間、音声通信、パ
ラメトロン計算機や人工知
能の研究を通して、我國の
情報工学の育成に貢献され
ると共に計算センター、大
型計算センター、応用情報
学研究センターの設立に多
大の尽力をされ、さらに近
年は学会会議委員として活
躍されている。今後は、電
気通信大学で、この分野で
のご活躍を続けられること
になっている。

本多先生は、昭和十九年
東北帝国大学工学部通信工
学科を御卒業後、東北大学
大学院特別研究生を経て、
昭和二十一年より東北大学
に勤務された。昭和二十六
年に工学部助教となり、昭
和三十五年以来電気通信
研究所教授として情報理
論部門を担当された。その
間、昭和四十七年の十一月
から五十年十一月まで当研
究所所長を務められた。本
多先生は、情報処理工学の

編集後記

本年度支部便りには、
八木先生の御逝去と宇田先
生の御急逝という重なる悲
報が掲載されることになり
ました。

五月中旬に本年度支部便
りの企画をたて、それに
したがって諸先生方にお願
いした原稿(本支部便り
二、四面に掲載)の大半を
すでに手許に頂いた頃、突
然宇田先生がお亡くなり
になったことを聞きました。
本支部便り中の宇田先生が
お書きになった原稿は、五
月二十三日の八木先生の胸
像除幕式記念講演会の際に
先生にお願いしたもので、
六月初旬に幹事のもとに送
って下さったものです。聞
くところによりますと、先
生は、胸像除幕式の日の後
まもなくして御入院になっ
たそうですから、この原稿
を御入院の直前にお書きに
なったものと思われま
す。八木先生、宇田先生の御
冥福をお祈りし、お忙しい
中に原稿をお書き下さった
諸先生方にお礼を申し上げ
て編集後記とします。(幹事)

なっている。準備中
、昨年度よりは
なるものと期待
ころです。就職
ては従来同様同
方々の暖かい御
お願いいたしま
ましよう。ま
一月電子工学科
教授が、本多波雄
年四月名大工学
の後をうけて電
所長になられ
通研に移られま
いたしてあり
吉田教授は電
室は従来どお
だいておりま
十二月電子工
教授が本学図
りました。従
文科系の方が
通例であり、
館長は本学創
教授が第二目
図書館の運営
こんで下さる
れます。

なり東北大学
が片平地区の
ターより独立
これに伴い電
教授が同セン
れ、センター
のため、いろ
られます。

月通信工学科
が教授に昇任
計測学講座
ことになりま
通信工学科西
月に回路網
は昇任され
電子工学科
本年八月よ
部電子工学
した。各先
躍を期待い

一方、長年電気系の通信
情報工学の教育研究におよ
び計算機関係にご尽力をい
ただいた応用情報学研究所
ンター長の大泉充郎教授は
本年三月をもって東北大学
を停年で名誉教授となら
れ、四月から電気通信大学
の教授とされました。大
泉先生の永年にわたる御薫
陶に深く感謝するとともに
一層の御発展と御健康をお
祈りいたします。

三学科の現在の構成は昨
年度以後講座編成に特に変
ったことはありませんの
で、次のようになっています。
電気工学科：二村忠
元、麻生忠雄、村上孝一、
安達三郎、竹田宏の各教授
と、千葉二郎、曾根敏夫、
後藤幸弘、大沼俊朗、阿部
健一の各助教および菊地
新喜講師、通信工学科：虫
明康人、星子幸男、清水洋
(目下在外研究員として米
国出張中)、斎藤伸自、
高木相、兼任の佐藤利三
郎、同じく木村正行の各教
授と斎藤恒雄、石曾根孝
之、西関隆夫、兼任の長沢
庸二、同じく丸岡章の各助
教授、電子工学科：和田正
信、八田吉典、柴田幸男、
松尾正之、併任の吉田重知
の各教授、佐藤徳芳、針生
尚、樋口龍雄、渡辺英夫、星
宮望(一ヶ年のスウェーデ
ン・ウプサラ大学での留学
を終え去る七月帰国)の各
助教となっておりま
す。なお一般電気工学講座に
は昨年に引きつづき穴山武
教授と脇山徳雄助教(二
ヶ年のベル研究所の留学を
終え、去る三月帰国)がお
られます。

一万、大学院の方は電気
及通信工学専攻主任の岩崎
教授(通研)と電子工学専
攻主任の和田教授がお世話
下さっております。また関
連の深い情報工学専攻は昨
年度と同様佐藤利三郎、木
村正行の両教授、長沢庸